

源氏物語千年紀記念第三回公演 源氏物語と音楽の夕べ

たまかづら 玉鬘

源氏物語 年記
紫のゆかり、ふたたび

本日は本公演にお運び頂き御礼申し上げます。まだまだ寒いですが、新年の春公演でございます。夏、秋と続け、めでたく第三回になりました。(あれ、冬公演はなかったのかな。それにしても、明治の文化遺産にして、教会の洋風な風味もあるこの時計台ホールで、しかも西洋の楽器とともに、日本の古典の代表をエンタテイメントにアレンジしたものを聞くというのは、なんとという錯誤、変態的な冒険でありましょう。このアプナサも含めて、今回の源氏物語公演、存分にお楽しみください。

ガイド御紹介

本公演は、諸般の事情のため中止させていただきます。ご期待なさっていた方、応援いただいた皆様にお詫び申し上げます。

特殊な平安宮廷文化の源氏物語から、今後はもう少し広く、地方

の文化や別の時代の文化にも迫って行きたいと思っている。

あらすじ

大塚修司このパンフレットの筆者

札幌生まれだが関西生活が長い。中高生に古文をおもしろおかしく教えてきたつもりだが、センター試験の国語を解いて満点を取ったためではない。別に源氏物語の研究者でもなんでもないが、古い日本、現代ではない感じ方や人間関係に興味を持つ。

初音 流離の姫君・玉鬘

玉鬘のお姫様は、京都に住んでいたが、幼い時母親の顔が行方不明になり、三人の従兄弟や親戚と共に九州筑紫に下った。二十歳の時に、大夫監(たいふのげん)という地方の有力な武士が、玉鬘の二人の従兄弟を味方につけ結婚を迫ってきた。もう

一人の従兄弟と祖母と女達はこれを恐れて、玉鬘を迎えに来る前に京に逃げた。京では仕事もなく、神仏に神頼みをした。奈良長谷寺に歩いて参った途中で泊まった宿屋で、偶然、昔行方不明になった母と一緒だった「右近」という召使いの女房と鉢合わせをした。右近によると、母の母はすでに亡くなったが、母と付き合っていた「源氏」の所で働いているのだ、という。源



アンケート・ご感想、出張公演依頼をお待ちしております。その他ご用件をどうぞ。また、ホームページには脚本もございます。メール hendayo@nifty.com ホームページ <http://homepage1.nifty.com/henda/play/>

篝火 恋の争いの一年

新年、玉鬘は、源氏のお屋敷に住んでいた。実の父「内大臣」に会いたいのだが、内大臣は娘達も多く、笑われている近江の娘

氏は玉鬘に手紙を送り、母を死なせた罪滅ぼしに、玉鬘を引き取り、実の父には折り返しを見て逢わせたいと申し出た。玉鬘は実の父に会いたかったが、親族の者達は、高貴な方と縁ができるのを神仏のお導きだと喜び、結局源氏の屋敷に住むことになる。だとは知らない。桜の日、柏木は猫がたまたま開けた御簾から見えた玉鬘に恋をしてしまった(このエピソードは実は流用)。源氏の弟「蛸の宮」も求婚者である。源氏は玉鬘の所へやってきて、求婚者達の手紙を見たり、玉鬘に意見をしたりしている。源氏の奥様「紫の上」は源氏が玉鬘に気があるのを見抜いて

ている。ある梅雨の日、とうとう源氏は玉鬘に告白をして迫る。玉鬘はそれを拒み、源氏を嫌うようになる。夏、源氏は蛸の宮に、蛍に光る玉鬘をわざとかいま見せたりして、遊んでいる。「髭黒大将」は奥さん北の方が物の怪が憑いていて、それでなお玉鬘に執心する。「柏木」は玉鬘に会うと緊張して歌も歌えない。台風の日、「夕霧」はたまたま、源氏が玉鬘に迫る姿を見て、疎ましく思う。

藤袴 恋の争い後編

帝の行列を見て男達を評価する玉鬘。源氏も息子に怪しまれたこともあり、玉鬘を帝のところにおくことにし、内大臣に対面させることにした。内大臣は源氏と玉鬘の仲を疑うが、とにかく喜んだ。柏木は実の姉と判

明したので喜んでいて、猫を盗んだ告白までしてしまう。夕霧は他人だということがわかり、度を失い、玉鬘に告白をしてしまい、後悔する。髭黒大将も結婚に「命をかける」と歌に詠む。玉鬘は蛸の宮にだけは手紙の返事を出していた。

真木柱

結句
言い寄る男から玉鬘が選んだのは……



前回08年10月「朧月夜」公演の様子

登場人物

主な登場人物の紹介をします。古文での描かれ方も参考にどうぞ。

玉鬘（たまかづら）

今回の物語の主人公。源氏物語中盤の重要人物。源氏物語の登場人物の描写や性格は、ほめ言葉で表現されたり独特でわかりにくいのですが、行動等から推測します。玉鬘は紫の上ほどではないが、かわいい等と書かれています。源氏はじめ人との渡り合いもしっかりしていて、しかも配慮があり立場を忘れない。そのため悩みもあるわけですが、また、田舎育ちゆえの自由な感じ方や物言いもしています。「いとほなやかに、こころぞ曇れると見ゆるところなく、隈なく匂ひきらきらしく、見まほしきさまぞした

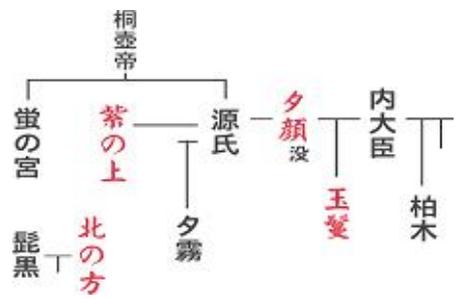


まへる」「手は、はかなだち、よろぼはしけれど、あてはかいて口惜しからねば」「八重山吹の咲き乱れたる盛りに、露のかかれる夕映えぞ、ふと思ひ出でらるる」「むつかしと思ひてうつぶしたまへるさま、いみじうなつかしう、手つきのつぶつぶと肥えたまへる、身なり、肌つきのこまやかにうつくしげなる」

いずれも玉鬘についての描写で、順に「華やかで陰鬱さが無く輝くようで、じっと見ていたいくらいだ」という描写「初音巻」筆跡が弱く崩れかけているのが高貴だ」という形容「玉鬘夕霧が玉鬘を垣間見て花にたとえる形容（野分伏せている姿も心ひかれるという、官能的な描写（胡蝶「つぶつぶ」は「つづら」）「つぶ」の語源で豊満なようす。

大夫監（たいふのげん）九州筑紫の有力者。玉鬘のいとこたちを味方につけ、玉鬘に求婚する。次のように描かれています。三十ばかりなる男の、大

長谷寺に参詣しに行ったときに、偶然玉鬘一行と出会います。もととは、玉鬘の母「夕顔」の召使いの女房。夕顔が物の怪に襲われ亡くなり源氏の召使となりました。よく働き、源氏とも気が合うようです。右近が寝る前



訳三十くらいの男で、背が高く重々しく太つて、汚い所はないが、気のせいか疎ましく、荒っぽい振舞いなど、見るもゆゆしくおぼゆ。色あひ心地よげに、声いたう嘆れてさへづりるたり。

源氏の「奥様」。源氏が子供の頃から、育て上げてきた。源氏といつも一緒に暮らしている。事実上の正妻である。しかし、源氏の浮気にも嫉妬させられている。若紫巻に始まり幻巻まで出てこない巻はない(多分くらい脇役のような主役で、源氏物語の中心人物。

に源氏の「足のマッサージ」をしながら言います。「誰か、その使ひならいたまはむをば、むつからむ」訳「源氏様にお任せし馴染むのを誰がいやがりますか。」(玉鬘4) 源氏は、あまり右近と打ち解けすぎると紫の上が嫉妬するかもしれないと答えます。それくらい親しい関係です。

紫の上（むらさきのうへ）

源氏の「奥様」。源氏が子供の頃から、育て上げてきた。源氏といつも一緒に暮らしている。事実上の正妻である。しかし、源氏の浮気にも嫉妬させられている。若紫巻に始まり幻巻まで出てこない巻はない(多分くらい脇役のような主役で、源氏物語の中心人物。

源氏と正妻葵の上の息子です。源氏の教育方針で苦労させたので秀才になりました。だが、秀才にありがちなまじめ人間で、父源氏とは反対の堅物です。女性の気持ちにわきまをえない人物に描かれています。源氏物語後半では夕霧の活躍は多くなっています。源氏一色だった話に普通の男性として登場するのが面白い。この人と「雲居の雁」との純愛物語、雲居の雁との平凡な？結婚生活、あこがれの紫の上、急

転「落葉の宮」にのめり込む話。夕霧の話は現代でもありそうな話の宝庫です。

柏木（かしわぎ）

内大臣の息子です。夕霧とは友達。蹴鞠と琴が得意。関西弁にしました。ナイーブで好きな女の子の前で緊張する反面、猫を身代わりにして妄想をするなど、現代にもいそうな人物です。そして、実はこの気の弱さが後々短命の元になります。

高き心ざし深く、やもめにて過ぐしつ、いたくしづまり思ひ上がれるけしき、人には抜けて、才などもこともなく、つひには世のかためとなるべき人なれば、行く末も頼もしいけれど、なほまたこのためにと思ひ果てむには、限りぞあるや

訳「理想が高くて独身です」しながら、大変落ち着いて自負のある様子が、他の人に秀でて、才能も殊で、将来は政治の中心になる人なので、行く末もたのしいが、(女三宮の婿の候補と決定するには)ぎりぎりだ。「若菜上」

面では有名です。兵部卿宮、人柄はめやすしかし。同じき筋にて、異人とわきまへおとしむべきにはあらねど、あまりいたくなよびよしめくほどに、重き方おかれて、すこし軽びたるおぼえや進みにたらむ。なほ、さる人はいと頼もしげなくむある。

内大臣（ないだいじん）

玉鬘の実の父。柏木の父。娘もたくさんおり、最近近江の君も発見され連れてこられたようです。「夕顔」では「頭の中將」と呼ばれていました。出世したので呼び名も変わりました。関西弁にしてあります。

これは、朱雀院が蜚の宮について言った言葉です。訳「蜚兵部卿の宮、人柄は好ましい。同じ皇族で、他人と比べて軽んじるべきではないが、あまりにひどく弱々しく風流めいて、どつしりしたところがなく、少し軽い感じに思われるようだ。なお、たよりにない感じだ。なほ、(若菜上)

求婚者の一人。大夫監同様、武人です。この人は、玉鬘に好かれていません。奥さんや一人娘、真木柱をほつたらかしたまま、周囲を考えない一途な性格だと書かれています。北の方の思し嘆くらむ御心も知りたまはず、ひたおもむきにすくみたまへる御心にて、

玉鬘の父。柏木の父。娘もたくさんおり、最近近江の君も発見され連れてこられたようです。「夕顔」では「頭の中將」と呼ばれていました。出世したので呼び名も変わりました。関西弁にしてあります。

源氏（げんじ）

玉鬘の実の父。柏木の父。娘もたくさんおり、最近近江の君も発見され連れてこられたようです。「夕顔」では「頭の中將」と呼ばれていました。出世したので呼び名も変わりました。関西弁にしてあります。

若い頃は源氏と友達で、女性関係で敵愾心を燃やし騒動も起こしたものでした。現在は政治的対立勢力でもあります。この話に出てくるのは源氏と夕顔をはさんだ三角関係です。最初に夕顔常夏の女とつきあったのが内大臣です。その子供が玉鬘(撫子)。夕顔は内大臣の正妻に脅かされて逃げてしまいました。内大臣は行方不明になった後の消息を全く知りませんので、夕顔と玉鬘をずっと捜しています。

求婚者の一人。大夫監同様、武人です。この人は、玉鬘に好かれていません。奥さんや一人娘、真木柱をほつたらかしたまま、周囲を考えない一途な性格だと書かれています。北の方の思し嘆くらむ御心も知りたまはず、ひたおもむきにすくみたまへる御心にて、

35歳から37歳にかけての話。六条院も完成し玉鬘十帖は源氏物語の絶頂期にあたる。カッコ内は巻名で数字は洪谷栄一による章段

脚本について弁解いや解説をします。脚本について弁解いや解説をします。脚本について弁解いや解説をします。

柏木と夕霧

この二人は、原作を変えてあります。二人の個性はとも面白いので、源氏物語内の他の部分からも、玉鬘の話の中に持ち込んでみました。

脚本弁解説

まず、柏木と女三宮の話が猫をさらったり、蹴鞠の時にいかい見たりするのは玉鬘の話の中ではなく、女三宮との間のことです。

女性の物語

テーマとしての問題は、なんと言っても、ラストの結婚が決まるどころです。たまたま、似たお話を見つけました。

グリム童話の「つぐみの髭の王様」です。昔ある王女が、言い寄る求婚者にけちをつけたあげく、なんと最悪の乞食と結婚することになってしまふ。それからそのお姫様が苦勞するお話です。「髭」というのも共通するし、まさか紫式部がこの話を知っていたわけでもないでしょうが、共通点がありますね。あつちの方は教訓とハッピーエンドが用意されています。また、

髭黒と弁

こちらはプライドが高い女の人の話ですが、こちらは純粋に男になびかない話。多分、理想の男性(父親)像が心の中にあつて、現実の男に興味がない。そこから、思いついてこのシナリオを仕上げました。まあ「竹取物語」の反

原作では「弁」という召使いの女房が、髭黒のいいなりになって髭黒を玉鬘の寢室に侵入させる手引きをしたことになっています。玉鬘は逃げられず、その結果、弁は玉鬘から憎まれます。

しかし、私は「弁」は単に悪役なのではなくて、実は玉鬘の無意識を体現しているのではないかとも思います。そもそも、召使いの女房というのは、源氏物語のなかでは、

おしやべりで、噂を流したり、秘密を知っていたり、自分たちの意見や感情を隠さず、時には登場人物に同情したり非難したり、リラッククスを与えたり、時には下品で時にはエロい。召使いという立場の軽い人だからこそ、隠れた気持ちを代弁しているのだとも思います。代弁したい名前も「代弁」の「弁」です。

玉鬘は帝の行列(御幸)の髭黒を見て「心づきなし(嫌だ)」と感じ、続く地の文にこんなことが書いてあります。色黒く鬚がちに見えて、いと心づきなし。いかでかは、女のつくろひたてたる顔の色あひには似たらむ。いとわりなきことを、若き御心地には、見おとしたまうてけり。



黒が似ているわけがありません。これは道理に合わない感じ方で、まだ若い気持から髭黒を軽蔑したのでしょうか。この部分は筆者の感想をそのまま書いてある「草子地」にあたります。筆者が玉鬘を結構きつくっつけていますね。叱つたりして登場人物は変な方向に：ひよつとする。筆者は髭黒に男らしさを感じているのかもしれない。蜜の宮に代表されるような繊細な宮廷貴族の文化の対極でもありそうです。

現代でも「なんであんな人と結婚したのかわからない」などと言うことはよくあることです。本人でさえ分かってなかったりするのだから、ましてや抑制の強い平安貴族の話。玉鬘も自分の「不幸」の由来が分からないのかもしれない。



朗読

およそ源氏物語はドラマチックでありません。気持ちの流れに沿った文体は味わいがあり、どこをとつても朗読にはなりそうですが、短い部分を取り上げてドラマにするのは難しく、何を生かしたら面白くなるのか悩みます。紫式部は源氏に語らせています。物語は読者が面白いように極端なものを集めている。だから、極端なものから、よりリアルなものである源氏物語を私は書く(多分)ということでしょうか。それにしても、玉鬘のさすらいの話は源氏物語の中では「夕顔」「朧月夜」と私たちの朗読ではお話しっぽい部分を選んで来たわけですが。

紫式部の女性観

紫式部は朱雀天皇に次のようなことを言わせています。

さきさき、人の上に見聞きしにも、女は心よりほかに、あはあはしく、人におとしめらるる宿世あるなむ、いと口惜しく悲しき。

与謝野晶子の訳を得ています。『今まで一般の世の中に見えて

も、女というものは、その人の意志でもなしに、ほかから働きかける者のために悪名も立てられ、恥辱も受けるような運命になっていくのがかわいそうだ。(若菜上) 紫式部は玉鬘を、どう思つて描いていたのでしょうか。

平安の恋愛

平安時代には、身分の高い貴族の女は男に顔を見せないようにしていたのです。多くの男が、顔も見ないのに噂と身分だけで女性を恋愛対象にするというのは、およそ現代人には理解しがたいことでしょう。いや、現代でも一目惚れとかはあるし、芸能人のイメージだけで恋をしたり、話だけ言葉だけで恋することもありうるでしょう。今そういう恋があるとすれば、素朴ささえ感じられます。しかし、当時といえども、姿は見ないけれども声は聞いたり、合奏したり、お手のやりとりはしたりします。噂も物語中に具体的には触れられていないけれど、情報源となる女房によつては結構詳細に伝えたりするのではないのでしょうか。ですから、現代の感覚から大きく離れているわけではないのです。現代でも姿は見えても心は見えずといったことはあるわけで(駄弁)

和歌は物語の感動の中心です。貴族は日常的な生活でも、言いくいことを、和歌にして詠んで相手に感情を伝えました。しかも、それが知識や美やセンスの表現でありました。貴族の教養とされていたのです。現代でこれに近いのは何でしょう。か。メール？お手紙？うーん

玉鬘の独白の歌

「行(ゆ)く先(さき)も
見(み)えぬ波路(なみぢ)に
舟出(ふなで)して
風(かぜ)にまか
する身(み)こそ浮
(う)きたれ」

訳さなくてもこのまま現代語でも分かるような歌ですね。「風まかせ」なんて平安時代からあったのです。まあ、そんな気楽じゃないと言われるかもしれませんが、最後の句は、自分の「身」が浮いた状態だ、ということです。玉鬘が両親を探すのに当てもない旅にさまよっている心の状態と、船に乗るイメージを重ねています。「浮き」が「憂き」(うれ)という意味を暗示しています。「掛詞」と言うほどではないですが、この歌は「あてき(兵部の君)」という女性からの別れの歌に玉鬘が返した歌です。(玉鬘巻)

柏木から玉鬘へ

「思(おも)ふとも 君(き)みは知(し)らじな わきかへり 岩漏(いはも)る水(みづ)に 色(いろ)し見(み)えねば」

訳「わたしは思っているけれども、あなたは知らないだろう。湧きあふれる水のような思いが、岩から漏れだしている。だが、水には色がないから、それと伝わらないのでしょう」(胡蝶巻)

和歌の解説

脚本では玉鬘に直接渡した歌としました。実は原作では、玉鬘はこの和歌を開けていなかった。だから返歌もありません。柏木が玉鬘の噂だけで送った歌。「あなたは私の強い思いを知らない」というものです。まあ、会うたことさえないのだから当たり前ですが、噂だけで恋愛感情？このあたり平安貴族文化の変な所ですね。しかし歌は思いをこめるもので、状況さえ創作です。片思いの歌にはちがいがありません。

源氏から玉鬘へ

「橘(たちばな)の 薫(か

を)りし袖(そで)に よそふれば 変(か)はれる身(み)とも 思(おも)ほえぬかな」

訳「あなたを、橘の香った昔の人夕顔の袖に、思い比べて見ると、あなたは夕顔と変わった身だとも思われないことだ」(胡蝶)

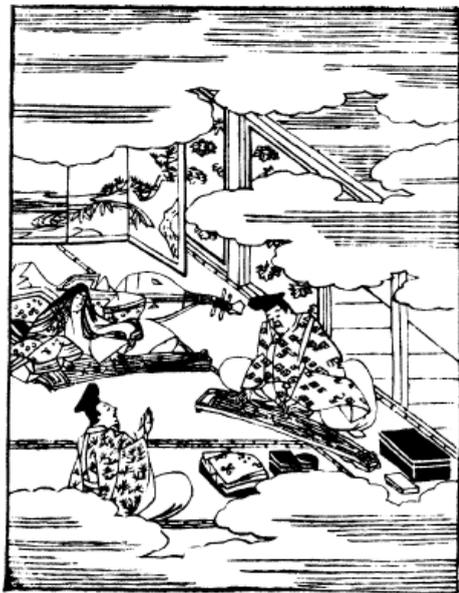
玉鬘の部屋で、源氏がたまたまそこにあつた果物の橘みかんの類)を手にとつて、歌つた歌。何でも歌の材料になるんですね。しかも、古今集の「五月待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする」という歌をふまえている。「昔の人」夕顔に持つていた恋愛感情を今あなたに持つていますよ、と玉鬘に迫る歌。母親の夕顔は亡くなっているのですが、玉鬘は母親にたとえられてどう思つたのでしょうか。とにかく、玉鬘は迫られて困つて、そんなことを言うのだったら私も母親みたいに早死にしたい

蛩の宮から玉鬘へ

「鳴(な)く声(こゑ)も 聞(き)こえぬ虫(むし)の 思(おも)ひだに 人(ひと)の 消(け)つには 消(き)ゆるものかは」

訳「鳴く声も聞こえない蛩の火。その思いさえ、人が消そうとしても消えるものだろうか。(まして…)」(蜩)

ばつと読んで難しい歌です。難しさの中に蛩の宮の技巧が表されているようです。助詞「だに」(現代語の「さえ」)を使って、泣かない虫でさえ消せない火(思い)があるのに(まして私の思いは消えない)と歌っているのです。反語「かは以下が省略されているので、受験にはここが出る?? 最後までとは言わない平安貴族の気品の代表のよう



な歌ですね。「おもひ」のなかに「火」が含まれていて、それが下の句につながつてゆきます。この場合は「掛詞」でしょう。この歌に対しては玉鬘は珍しく返歌をしています「声には出さぬ蛩の火の思いの方が深いのではないかしら」と。なんだか恋愛のベテラン風の返歌ですが、蛩の宮と歌をやりとりするのが面白かつたのかもしれない。

夕霧から玉鬘へ

「同(おな)じ野(の)の 露(つゆ)に やつる 藤袴(ふぢばかま) あはれはかけよ かことばかりも」

訳「わたしとあなたは同じ兄弟という野原で育つた。いま涙でみすぼらしくなっている藤袴(私)に、気持ちをかけてください、ほんの少しでも」(藤袴)

脚本では語りませんが、夕霧と玉鬘は同じ祖母大宮を持つていて、その祖母が亡くなった。兄弟でないことが分つたものの、やはり同じ喪に服す縁のある者同士であることを言いたいようだ。「やつす」は身をやつすなどと現代語でも使われ、「外見をみすぼらしくする」ことです。「やつれる」の語源「かごと」はもうしわけ、言い訳、ぐち」の意で「かごと」同源。玉鬘は「かごと」を逆手にとつて返歌をしています。「藤袴の縁とい



うのこそ「かごと」(申し訳程度の)でしょう」

髭黒から玉鬘へ

「数(かず)ならば 厭(いと)ひもせまし 長月(ながつき)に 命(いのち)をかくる ほどぞはかなき」

訳「もの数に入る人間ならば、いやがるにちがいない九月に、私は命をかけるなんて、なんとほかない身の上だ」(藤袴) ます、花鳥風月も何も歌われ



ていない。ただのストレートな意思表示という、なんとも髭黒らしい歌です。わかりやすさという点では、最初の玉鬘の歌と同じですね。この歌のわりによくい部分は、一種の古典常識でもないが、平安時代は色々暗黙の習慣があり、九月には普通なぜか結婚はしないのです。それなのに、この私はこの月に頼っているのが頼りないという、自分を卑下している風の歌です。